



発行 真宗大谷派 高山教務所  
 発行者 出雲路 善公  
 〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
 ☎(0577)32-0776  
 \*毎月20日発行 50,000部  
 三市一郡無料配布  
 印刷 山都印刷株式会社

# 念じられ 照らされて

## 時代への視座を 親鸞聖人に学ぶ

藤元雅文



〔略歴〕  
 一九七二年生まれ。大谷大  
 学大学院博士後期課程真宗  
 学満期退学。二〇〇七年博  
 士(文学)取得。二〇〇七年  
 大谷大学講師、現在に至る。

あるジャーナリストが、二〇一五年の出来事を振り返ると二十一世紀は「テロの世紀」と後の世の人々から呼ばれるようになるのではないかと語っていた。その言葉が、胸に突き刺さったまま、普段は忘れていても時々うずくようによみがえってくる。

このように時代、社会の現状に眼差しを向け、言葉にし、発信する人の存在は、時代社会の認識にとって重要であろう。ただ一方で私は現代とはどのような時代であるのかを言葉にする前に、その問いを、どのように問うことができるのかについて退歩して考え、確かめる必要があると感じ

ている。なぜなら、例えば「テロ」という出来事には、まずそれを行う者の理由や背景が存在し、またそれに巻き込まれ危害を受け、後遺症などを抱えて生きざるをえない方々がいる。その人々の生きた声に向き合うことなく、自分の都合に合わせて生活する自分自身とが、どこで時代を問うことができるのか、それは不可能なことではないのかと思うからである。

東日本大震災の後に、福島から京都に避難して生活をつづけている方が、自らの思いを次のように語っていた。当初福島からの避難をこころよく支援してくれた人々たちへの感謝の念は今も変わるこ

においても、自分の都合の範囲でのみ「支援」に関わろうとする課題をはつきりと教えられた。しかし、そのことを自覚したうえで、なお支援を必要としている人とのような意義のある関わりが可能なか、そのことが分からないままであった。

この言葉を聞いたしばらく後であったが、私には忘れることのできない言葉を聞くことができた。それは岩手県宮古市で震災当初から支援にあたりつづけていた先輩が、真宗学を学ぶ学生たちの前で講演をした時の言葉である。その先輩は、講演の最後を次のように結ばれた。

「本当にもとめられていたのは、支援する―支援されるという関係を超えて、人として出あうことだ」と。

例えば、親鸞聖人は生涯にわたって自らを「師」という立場に決して置かなかったが、それは具体的に「いなかのひと」との中に「われら」を見出し共に御同朋として生きあうものであった。その「われら」とは貪り、怒り、憎しみの心がなくなるのではない身を生きていく凡夫として一点も変わることはない「われら」であり、業縁の関わりの中を生きる「われら」である。

「支援する―支援される」という関係を超えて、人として出あう」ということは、「われら」という関係を生きていく自己のあり方に深くうなづくことである。しかしそれは「われら」全体を照らし出し、支える視座がなにかぎり成り立たないことであろう。親鸞聖人は、誰一人決して見捨てない誓われた本願に、「われら」が生きている世界を問い、照らし出す根拠を見出された。その本願の教えに、課題の絶えない時代への視座を学びつつ歩んでいくこと、そのことが私自身に問われていると切に思う。

### 要注意! あなたは狙われている

大学などの新入生がいるご家庭へ  
 オウム真理教の事件から20年。カルト宗教は収束した問題ではありませんが、今も様々な勧誘方法を駆使して、入信した信者に全てを委ねさせ、その人の自由な思考や判断を奪い支配しようとしています。その結果、家庭生活が破壊され、社会的立場が失われ経済的にも追いつめられるという事象が起こっています。

親元を離れて新しい学生生活が始まったこの時期、家やこれまでの友だちとも別れて一人不安の多い時でもあります。そんな時カルトは、とても優しく親しげに声をかけて友人関係を作りながら、言葉巧みに誘ってきます。その勧誘については、大学なども注

意を呼びかけるので構内で誘うことは少なくなっています。現在はインターネットを介して新入生歓迎の催し、就活セミナー、ボランティアサークルなどの呼びかけや個人的接触から勧誘に入るケースが増加しています。

もちろん様々なサークルや活動への呼びかけがいつもカルトの勧誘であるわけではありません。肝心なことは、たまたま出会った誘いがカルトの勧誘であることに気づき、深みに嵌る前に引き返すことです。そのために必ず必要なことは、こうした問題があることをしっかりと知っていただくことです。

真宗大谷派では、こうした問題を知っていただくために学生向けのパンフレットを用意しています。ご入り用の方は教務所までお問い合わせください。



カルト問題の詳細についてはこちら

平成三十二年五月十日より十二日まで

# 飛驒御坊御遠忌七五〇

高山教区・高山別院  
 宗祖 親鸞 聖人  
 七百五十回御遠忌法要

## 飛驒御坊 高山別院 宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌法要

飛驒御坊 高山別院 宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌法要

飛驒御坊 高山別院

飛驒御坊御遠忌ポスター

☎テレホン法話(0577)(34)2313 ☎4月21日~30日:山本憲人氏「寶藏寺」 ☎5月1日~10日:五辻元駐在教導「教務所」 ☎5月11日~20日:江馬雅臣氏「寶誓寺」 宗教トラブル相談窓口(0577)3210763

家庭で読もう

私を照らす  
ひかりの言葉 ⑬

酒井 義一

出会いを求める人々

保育士だった妻が、お寺を会場に「子育てサロン」という動きをはじめ、めでた過ぎました。「いちこのへや」と名付けられたそのサロンは毎月二回開催され、子育て中の母親や乳幼児たちが集まってきました。

参加者は毎回十組以上。予想よりも多くの方が参加されます。その背景には、核家族化が進み、ひとり子育てをしている母親が増えているということ。それらの人々が子育て中の仲間や先輩たちとの出会いを求めているということがあ

るようです。若い母親たちとの会話の中で、時々「私、この子がかわいいと思えない時があるんです」。絞り出すようにその語った方がおられました。それはまるで、彼女の心の底からの叫び声のような気がしました。

妻はその母親に寄り添い、じっくりと話を聞きます。そして、自分の体験を相手に届けていきます。

どこにも届かない声

昨年警察が、虐待を受けていると児童相談所に通告した人数は、三万七千二十人だったそうです。大人が子どもに虐待をしてしまうことが、今や大きな社会問題となつていきます。

自分を表現する言葉を持たない幼い子どもたちが、暴力や暴言な

どによって抑え込まれ、心身を傷つけられているのです。そして、時にいのちを奪われていくのです。

そこには切実な叫び声があったはずですが、声にさえならないうめき声。しかし、叫び声やうめき声は、どこにも届くことはなく、無残にも踏みこまれてしまったのです。

弱く狭く悲しい存在

人間は、自分の思い通りにならない相手と出会うと、時に怒りを抱き、相手がまるで鬼のように見え

てくる場合があります。私も三人の子どもを育てる中で、思い通りにならない子どもたちに対して、時に怒りを抱きながら接してしまつたことがあります。相手が自分を困らせる鬼のように見えてくることもあります。

虐待という行為がわかる、などと言つてもいいありません。虐待を正当化することは、絶対にしてはならないことです。

しかし、人間は、思い通りにならない現実と直面した時、誰もが自らの内から鬼のような心が沸き起つて来るのではないのでしょうか。私にも思い当たることがあります。私も本質的に同じ問題を抱えているのだと思います。

自分の子を虐待によって死に追いやつてしまった人がいます。その人は力があるから暴力をふるつたのでは

ありません。その人は、暴力に頼らざるを得ないほど、相手と対話をする力を持たず、弱くて、狭くて、悲しむべき存在だったので

人間を深く悲しむ親鸞

わがこころのよくてころさぬにはあらず

『歎異抄』

親鸞聖人の言葉です。親鸞聖人は、自分の心がよいから人を殺さないのではなく、たまたま縁が熟していないから人を殺してはいないだけだ、と言われました。

「人を殺してはいけない」と言つたのではなく、私も縁さえ熟せば百人や千人も人を殺してしまえる人間である、と告白されたのです。自分中心に一切のことを考え、相手を平気で傷つけ、しかもそのことに痛みすら感じないもの、人間。

親鸞聖人は、仏さまの智慧の光に照らされながら、そのような人間存在を深く悲しまれました。そして「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」(『歎異抄』)という身の事実を直視されたのです。

光に出会うということ。そして、光に照らされながら自らの闇を知るとのこと。そのことを大切にしたいものです。



今回は藤場芳子さんの「女と男のナムアミダブツ⑬」です。

坊子ども会

日時 5月21日(土) 午前10時から

会場 高山別院

内容 母の日スペシャル ※ゲーム、オカリナ演奏

対象 小学生

参加自由・無料

主催 高山一組

公開学習会

日時 5月26日(木) 午後7時半から

会場 高山別院

講師 御坊会館 海法龍氏

内容 (東京教区長願寺) 歎異抄第八章 「はからいを超えて」

聴講料 500円

主催 高山二組若声会

飛驒の真宗

龍の水ふきの 伝承散歩⑬

一七六七(明和四)年、現在の飛驒市河合町保の集落で大火事が起こりました。村中が火の海となり、村にあった憶念寺にも火の手が移りました。村人や門徒たちは本堂を燃やしてしまつてはならないと、無我夢中で消火にあたりました。そのかいもあつて、本堂は全焼を免れました。とにかく必死で消火したため、消火活動の様子は誰もはっきり覚えていないようでした。あれだけの大火事だったのに、本堂が全焼しなかつたことはよくよく考えてみればとても不思議なことでした。憶念寺の本堂の向拝(本堂の屋根の中央が張り出した部分、本堂入り口の屋根部分のこと)には、龍の彫刻がありました。「あの龍が水をふいて本堂を守ってくれたんや」と、村

の人々の間では伝わつたということ。一九七〇(昭和四十五)年、ダムの建設が進み、村の集落は水没することとなりました。憶念寺は古川町へ移転し、新しく本堂を建立しました。旧本堂は、焼失してしまつていた神岡町の福寿寺(曹洞宗)の本堂として移築されました。向拝にあつた水ふきの龍の彫刻は取り外されて、現在憶念寺に保管されているということです。



憶念寺・水ふきの龍 明和4年の大火で村の大半を焼失したが、本堂は残った。それから向拝の龍が水をふいて消したという伝説が伝わっている。

飛驒御坊 御遠忌通信 ⑬

宗祖御遠忌記念事業 高山別院本堂屋根御修復工事着工 第一期工事起工式が 執り行われました



4月12日、桜の花満開のなか別院本堂屋根葺き替え工事の起工式が執り行われました。

起工式には、別院関係者、御遠忌委員会役職者をはじめ、このたびの記念事業の設計監理をいただく白鳥修設計士、施工業者である株式会社中村社寺の加藤雅康代表取締役社長にご臨席いただきました。

式の最後には、工事の着工を祝して乾杯が行われ、発声をされた高山別院責任役員の辻鉄太郎氏から、ようやく工事に着手することができた慶びと、今後も念仏の道場として高山別院を守り伝えていく決意が強く語られました。

現在、仮設足場の設置作業が進められており、5月には既設瓦の撤去作業、6月から9月にかけて屋根下地工事、銅板葺工事が行われ、高山別院報恩講前の10月末までには工事が完了する予定です。

御遠忌御修復懇志金御進納状況

76,806,000円 (4月14日現在)

御納金を賜りました皆さま方には、心より御礼申し上げます。また、今後とも、懇念を賜りますようお願い申し上げます。